鈴木文二氏への返事

天文月報編集長　佐藤修二

天文月報8月号に「内地留学で考えたこと」と題する4ページ（pp. 267-270）の記事が載った．何人かの人からおもしろかったとの反響があった．その内のひとりから月報編集部としての返事を書く必要がありませんか？と問われた．あらためて8節からなるその記事を読みかえして，編集部としてばかりでなく，他の役割——彗星研究者，プロの研究者，そして学術行政官の立場で答えなくてはカバーできないが，ついでに鈴木氏の論旨に沿って，感想も含めて私の考えを書こうと思う．

1．ハレー彗星と続くオースチン彗星のCNジェットの発見とその後の研究の発展は胸躍り，かつ胸痛む物語であった．同情とともに，思いがけない発見というのがどんなにむずかしいか　を思う．気が付いていても恥目を押す手段を持たなかったり，深く考え詰めなかったりで，発見のそばを通り過ぎてしまうことがある．

2．次にアマチュア天文の内部構造をリアルな眼で見ている．アマとプロとは別の山（ピラミッド）を構成している．しかし目標は同じく，天文学そのものであると考えられている．プロの下部構造としての仕事ではなく，自分が現在立っているアマチュアとして，直接天文学に貢献することが目標であると帰結されている．

3．それを実現するための方法と経験を具体的に述べられている．最新の研究を知る努力の重要性とアマチュア間の共同研究の有効性を提案されている．研究する者として独立した力を養うことはアマとプロとを問わず研究の基本である．にもかかわらず氏はプロのもつ利権と能力——設備や頭脳？——を要求する．ただそれは教えを乞うことではなく，正当に科学的な評価ができる場と人が欲しいということである．

ここで天文月報の活用と研究施設の解放を提案している．そのための議論の場がないこと　そのような場を作るための可能性を述べている．

4．最後に天文台の生活の中で，「遠くから見ると観測し，論文を書き，計算機を使い，常に議論を戦わせているかと思っていたが，落ち着いて研究できていない」ことに驚いておられる．そこで見られる科学行政の貧困さまで指摘されている．

以上の4点のうち，2番目と3番目は天文月報と直接関連しますので，これについて編集部の方針を述べます．

アマチュアの天文雑誌は多く出版されているが，直接天文学に寄与したいというアマチュアのために天文月報をどう生かすか．

アマチュアの本質はその自由さであり，好きなことができ，やってもよい．きれいな天体写真を競いあい，労苦にみちた望遠鏡作りを語り合うこともあろう．このような方面のアマチュア天文雑誌はいくつか出版されている．鈴木氏の場合はこれらとは意図を異にしておられる．アマチュアの立場から何とか天文学に寄与したいという思いをもった人々のためにきちんと学問的評価をしてほしいと希望されている．天文月報は他の天文雑誌と異なった存在価値があるだろう．投稿者をプロに限る理由はまったく無く，サイエンスを志す者であれば，プロ，アマを問わずぜひご投稿いただきたい．

またそんなに研究とか評価とかにこだわらずに，天文月報をアマとプロとの自由な研究交流の場とすることができないだろうか．私は「スカイ＆テレスコープ」誌を購読しているが，観測にしろ，望遠鏡作りにしろ，観測装置にしろ，創意工夫が豊かである．またそこにはプロの執筆もあるが実に解説は解かりやすく，内容は生き生きとしている．お互いにとっておもしろいのである．アマとプロとでは研究の対象や興味はスプリットしていてもやっぱりおもしろいのである．

さらにアマチュアとプロの共通する興味はもはや本当にないのだろうか．昔天文月報でもやさしい電波望遠鏡の作り方の紹介があった．CCD もずいぶんと安くなった．エレクトロニクス立国である日本ではアマチュアでも安価で，おもしろい観測装置等が作れるとおもう．このようなノウハウの交流もあるかもしれない．現在はアマチュアや公共団体のほうが立派な望遠鏡，観測機器や資金をもって，むしろプロがアマチュアの設備を使わせてもらう事例も生じている．

また天文月報の記事の中で生じた疑問や質問等も受け付けたいし，天文学のみならず関連する機器やソフトの情報交換にも天報月報の誌面を公開し，アマとプロの研究交流の場としたいと考えています．アマであれ，プロであれ，研究を推進するための場として天文月報を大いに活用して下さい．